

# 伏見城跡

調査期間：令和4年8月29日（月）～ 10月5日（水）  
調査機関：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課



## 1 はじめに

調査地は伏見区桃山町下野に所在し、伏見城跡に該当します。伏見城は、1596年に起きた慶長大地震の後、伏見山（木幡山）に豊臣秀吉により築城されました。大規模な曲輪群や武家屋敷群、町家などの周囲に惣構をめぐらせ、その範囲は東西約3.3km、南北約2.2kmに及びます。築城後、関ヶ原の戦いの前哨戦で戦場となり落城し、徳川家康により再建されます。伏見城は1596年に築城されてから、公儀の拠点、公儀の城、武家の棟梁の城として位置づけられ、政治の中心的な存在でした。廃城後は伏見奉行所の管理下におかれ、明治時代に入ってからも桃山官林として管理され、特に城の中枢部は、宮内庁管理の桃山陵墓地となりました。陵墓地となったため、陵墓造営以外の大規模な改変が少なく、廃城時の様子がよく残っています。

## 2 調査について

今回は対象地内に4か所のトレンチを設けて、発掘調査を行い、伏見城に伴う造成土や石垣などを確認することができました。特に4トレンチでは、表土直下で伏見城に伴う造成土のほか、東西方向の石垣や裏込めの石、崩落石などを確認し、石垣は幅7m、高さ1.8mにわたります。石垣の積石一石の大きさは、小口が35～50cmのもの、60～75cmのものがあり、奥行きは60～70cmが多く、最も長いものは95cmです。石垣は4段分確認でき、自然石と割石で構成されます。積石の一部には矢穴痕跡があり、矢穴幅は9～10cmのもの、14～15cmのもの、2種類が確認できます。石材の種類は、石英班岩や花崗斑岩が主体となります。刻印や墨書などは確認できませんでした。間詰石は、粘板岩（頁岩）を主に利用しているようですが、確認できる部分は少なく、埋没する前に間詰石が

抜き取られたためと考えられます。石垣の前面には崩落したと思われる積石や裏込めの石が多数確認でき、崩落時に積石がぶつかり割れた状況も認められます。根石と据え付けの様子や裏込めの状況を確認するため、追加調査を行いました。この結果、石垣施工前に地面を整地し、根石を安定させるため溝状にくぼめ、その後、根石を据えていることが分かりました。石垣前面の整地土には砂や拳大の石などを入れ、排水対策が行われていたと考えられます。焼土などは確認できませんでした。石垣の裏込め部分については、拳大から人頭大程の粘板岩（頁岩）が主体となっており、他ではあまり見られない造りになっています。裏込めの存在は、その高さまで石垣が存在していたことを示していることから、石垣は当時の生活面からは2.5m以上の高さ（想定では7～8段）まで施工されていたと考えられます。

## 3 発見した石垣について

今回の調査で確認したこの石垣の状況は、廃城時の様子をよく表しており、また絵図（図2）から復元した想定どおりの位置で確認できたことは、大きな成果です。また今後、検討を重ねていく必要はありますが、あまり例を見ない石垣の構造についても、重要な発見であったといえます。

近年、伏見城下での発掘調査では良好な資料に巡り会う機会が増え、秀吉の石垣か？家康の石垣か？という議論になることも度々あります。しかし今回の調査では、石垣に伴う遺物は乏しく、石垣の詳細な構築年代を特定することは現段階では困難です。ただ、伏見城の中枢部に近接している場所で遺存状況の良い石垣が確認できたことは、「城」、「石垣」、「普請」など多岐にわたる研究分野にとって、重要な一石となるものと考えます。

（奥井智子）

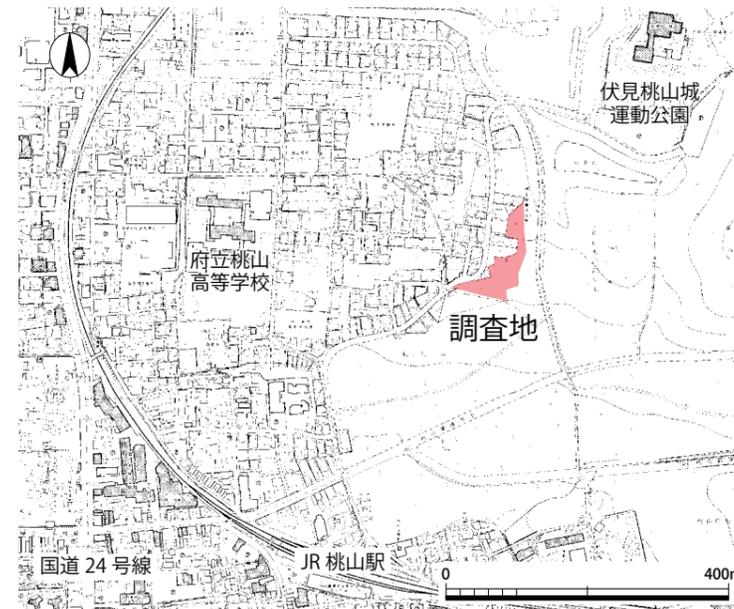


図1 調査地位置図 (1/10,000)

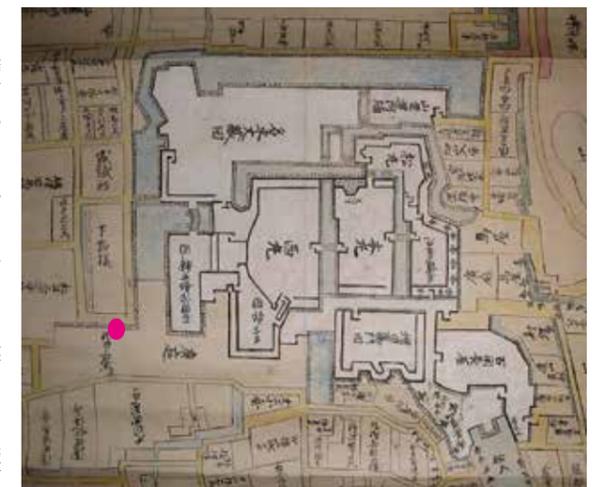


図2 伏見城御城郭並武家屋敷取之図（京都市歴史資料館蔵）の一部 上が北  
※ ●は、今回の調査地のうち石垣を確認した調査区を示しています。



図3 石垣検出状況（南から）



図4 石垣石 矢穴痕跡（南西から）



図5 石垣石 矢穴痕跡（南西から）